



鉄-低ニッケル合金の降伏について

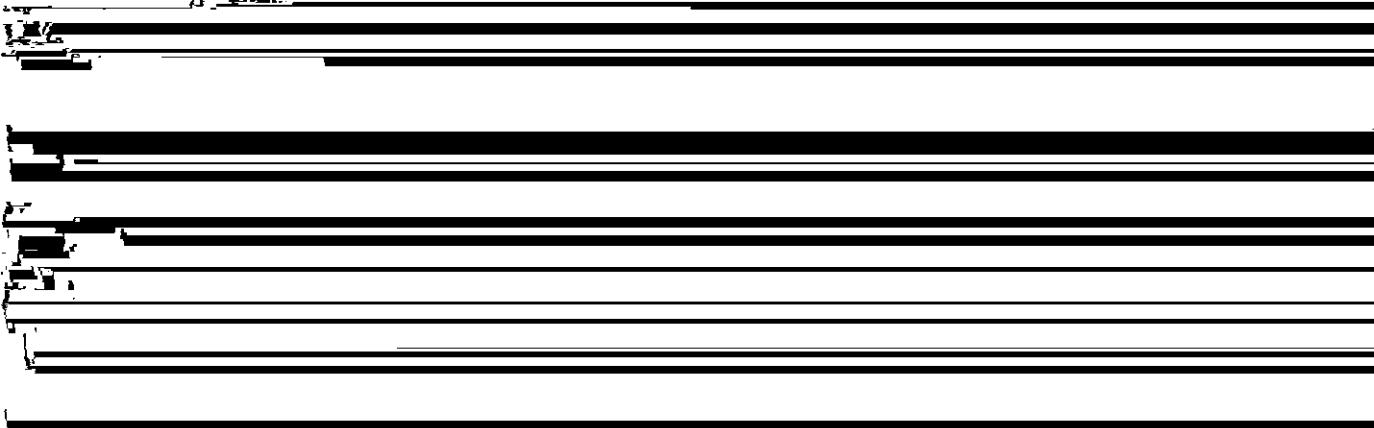
Yield Behavior of Fe-Low Ni Alloys

田中智夫* 渡辺修司**

Tomoo Tanaka Shuji Watanabe

Synopsis:

The yield stresses of several low-nickel alloys such as Fe-C, Fe-Ni, (Fe-C, Fe-Ni) binary



been investigated in the temperature range between 345°K and 77°K to clarify the effect of nickel on the yield stress of iron.

It has been found that Fe-C and Fe-Ni alloys show stronger yield stress than that of iron at room temperature, but that this situation is exactly reversed at temperatures below 200°K.

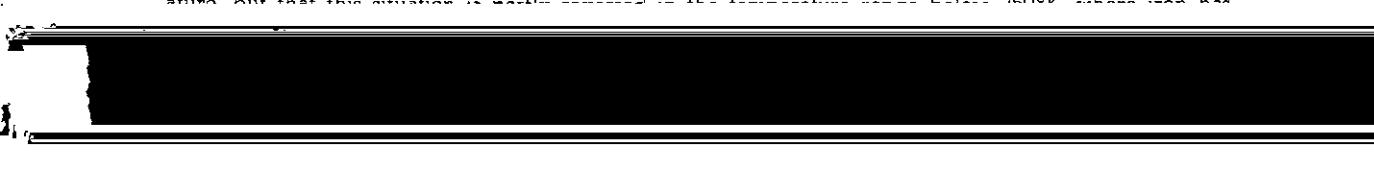


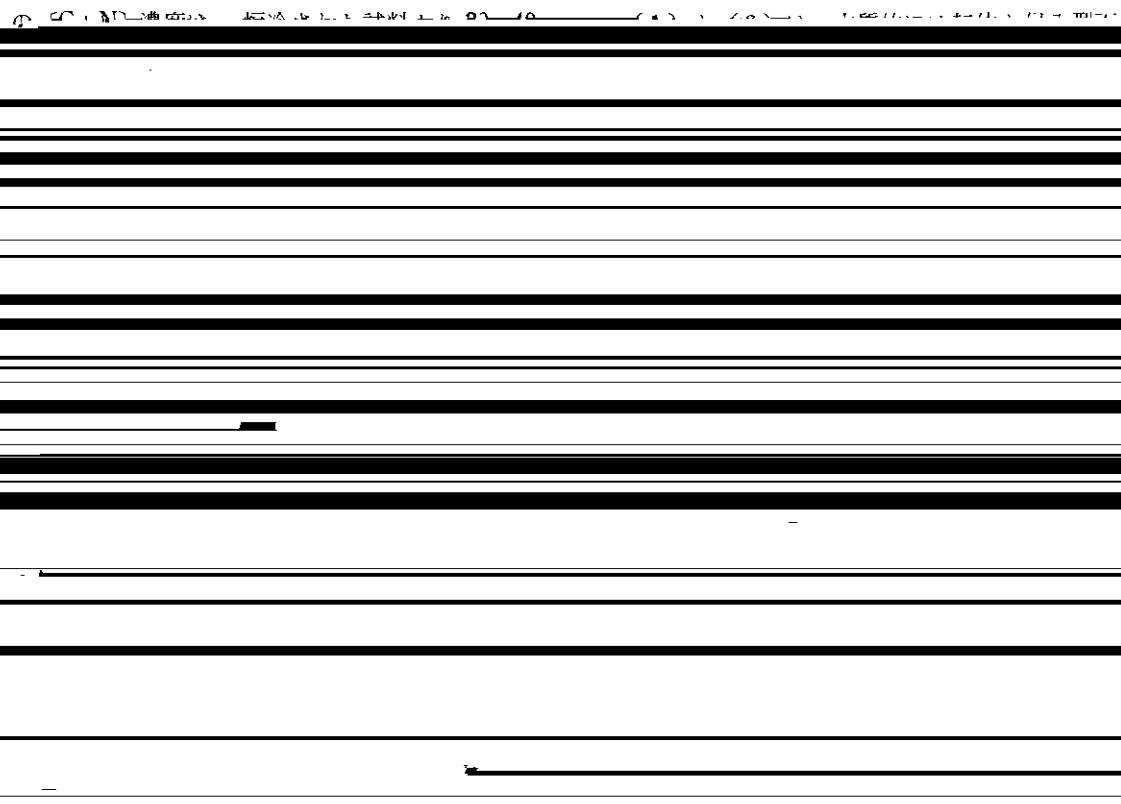
Table 1 Chemical composition of materials used (wt %)



結晶粒径に相違があつても同一材料では一本の曲

らべて減少するといわれているので 650°C から炉冷された Fe-Ni 合金の [C+N] 固溶量も 1 ppm 以下と考えられる。したがって加炭急冷した試料

- (3) パイエルスメカニズム^{16) 17)}。
- (4) 交差すべり（拡張転位の収縮）¹⁸⁾。
- (5) ジョグの非保存運動¹⁹⁾。



ppm多いと推定される。Fig. 5 (a), (b), および (c) に示された結果をまとめると、(1) Fe-C系はCの固溶量が増加するにしたがって室温近傍では固溶硬化、低温側で固溶軟化を示す。

Stein と Low¹²⁾ はC量が10~0.005ppmのFe單

純物との相互作用であって同じ機構に属している。この考え方では、Fe-Cr²⁰⁾, Fe-Mo²¹⁾, Fe-V²²⁾ および Fe-Ni²³⁾ 合金の固溶軟化は、合金元素の添加によって固溶 C量が減少することによる、と説明されている。(4)は交差すべりを行なうため、3種のすべり面上に分解している拡張転位が収縮

$$H_0 = H^* + \int_0^{t^*} v^* d\tau^*$$

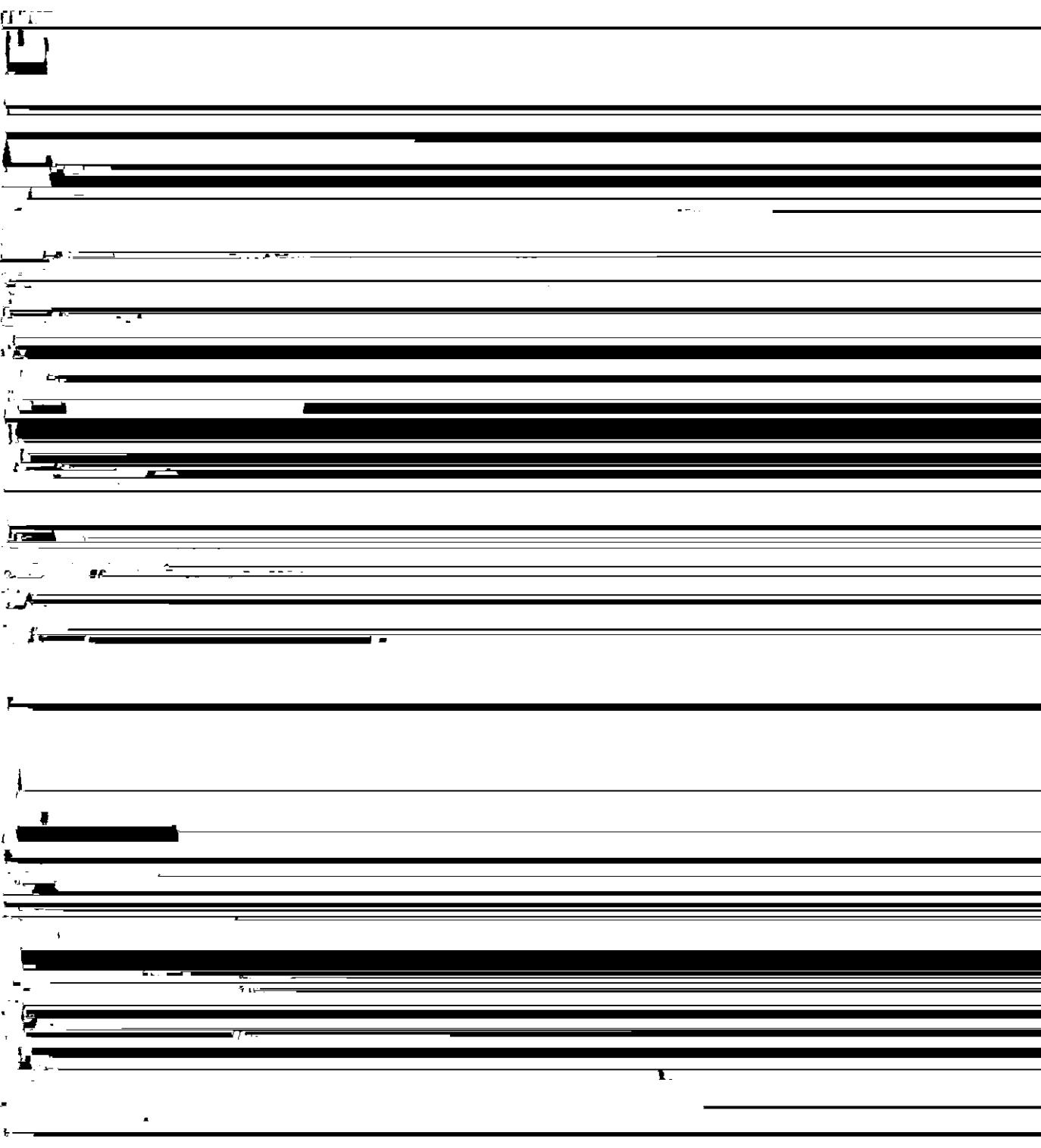
降伏応力の温度依存性の機構は単一過程である

レガ当用日中のが、降伏応力を、且つ単用する。

5 (a) Fe

5 (b) Fe - 1.43%Ni

5 (c) Fe-3%Ni





いる。Heller⁹⁾ らは Fe- 5 %Ni までの合金について内部摩擦を測定し、Ni は Fe 中の固溶C量、拡散速度、析出速度になんらの影響をおよぼさない結論しており、また Fe-Ni 合金中の N の応

それぞれ各材料ごとに有効応力 (τ^*) に対

ス相対的たる面の変化は、Fig. 14 に示す如

して一つの曲線上にのる。活性化エネルギー
（ H^* ）は Ni の添加量が増大すると低下

する。またダブルキングモデルを適用して、
Ni 添加による活性化エネルギー（ H^* ）の